

## 経営者に聞く・トップインタビュー

## 介護からより良い快適な快護へ

医療法人社団 藤花会グループ 会長 藤野正文氏



法人設立から20周年を迎え、介護から、より良い快適な快護への追求に力を入れる藤野正文氏。すでに次のステップに思いを馳せている。

分も含め70名余の職員も経験が浅かったのだ。  
 「慎重にスタートされたのは良かったですね。」

開設後も電話が鳴りやまずに、地域に困っている人が大勢いた事を実感し、私としては「困っている人のために必要なものを提供しなければ」と強く思いました。最初はCS（顧客満足）を実践すれば大丈夫であろうと考えましたが、その後CSよりES（従業員満足）の重要性に気づきより良いものを創っていくように強く思いました。その後、私たちの思いや、困った方が大勢いる状況をご理解頂き、80床から100床への増床を認可して頂きました。

「高齢化社会を背景に様々な施設が生まれましたね。介護保険も成長期でシルバ

ービジネスとして介護事業所を数多く作る所も出てきました。しかし自分と同じものをいくつも創ろうという考えはありませんでした。社会的利用で入所される方々には様々なタイプの人がいて、その姿を見ていると「本当にこれでもいいのか」と思ってしまう。もつとこの方に合った介護・医療を提供できないかと。

そこで良い雰囲気個室で「ここに入りたい」という選択肢を持つて頂けるようなグループホーム、家で過ごしたいと思っている方のためのショートステイなど、すべて専門棟で、こだわったものを創ろうと考えました。

「ビジネス的には難しくなりますね。」

から順風の船出でしたね。

いや、簡単ではありませんでした。開設には地元の方の同意が必要で、地域との調整には時間をかけました。

説明に伺っても「親は自分たちで面倒を見るもの」という固定概念がある一方、お嫁さんが「どうやって面倒見るのか。施設を創ってくれたら本当に助かる」と話し合いたい意見を重ねたり…。そうした時に町長や地元の方が間に入って「専門家もいて安心で安全、入浴や食事も藤花会さんが担ってくれるよ。第二の家みたいな気持ちで」と丁寧に説明してくれました。

「支援は心強かったですね。」

ですから責任重大です。開設1年目は80床のうち60床を稼働させ、とにかく事故の無いように余力を持ってスタートしました。多くの問い合わせを頂いていて、満床になるのは分かっていました。自

「法人設立から20周年を迎えられた。振り返って頂くと？」

日本に介護保険制度ができる平成12年に法人化し、14年に花平ケアセンター（浜松市北区）をオープンしました。

当時、引佐町の長山（芳正）

町長も町として施設が必要とお考えで、医療法人枠での介護老人保健施設の区分（80床）に誘致して頂きました。

祖父（故藤野正治氏・藤野整形外科前院長）が同地で無料診療を行っていた経緯もあり地元の方々からの賛同も得られました。当時は行政も我々も介護保険とリハビリがどうリンクしていくのか試行錯誤でしたが、寿命を延ばしていくだけでは超高齢化社会が進むだけで破綻してしまふ。介護保険を作り、高齢者施設・サービスを増やしていくという、まさに分岐点の時でした。

「望まれて出ていく形でした

経営者に聞く・トップインタビュー

ショートステイなどは運営上の難しさから避けられますが、ご利用者様に必要なサービスならやろうと。しかし、我々も継続していかなくてはならないので、他でしっかりとバランスを取ろうという姿勢でやるようになりました。それぞれが独立運営ですが、トータルでやっているからこそできるのです。

— そうした思いで現在の施設構成がトータルになっているのですね。

社会的利用の前の段階で、元気な方の集合住宅のような「井伊谷メデイカルコートガーデン」(サービスタ付き高齢者向け住宅、浜松市北区神宮寺町)は、自由で様々な生活に対応できて、レストランや医療もある施設です。次に手



「花平ケアセンター」から特別養護老人ホーム「藤乃花」(写真)まで、グループ施設のトータルケアは充実した。

掛けたライフケア金指(住宅型有料老人ホーム、同区引佐町)も、脳リハビリや手芸教室、短時間のショート型のトレーニング向けのデイサービスなどと多彩で、スタッフを女性専門にしたり、地域や対象者に合った介護をする事に注力しました。

— もっとも新しい施設は特養ですね。

競争ではなく協奏そして共創へ

— ハード面では充足したという考えですか？

デイサービスがありショートがあり、デイもいくつかのチャネルがあり、施設も住宅、有料老人ホーム、老健、特養とあり、これで一つのトータルケアが完成したと思っています。ただ、未来の話をするなら、新事業として障がい者の方々のための施設を創りたいですね。

祖父が医師業務と同時に浜松養護園の園長を務め、障がい者の自立支援にも積極的に取り組んでいました。資格を身に付けて頂いて、働く場所を作って、技師や師長も障がい者の方を雇用しました。私は事業を大きくする事が目的ではなく地域に必要とされるものを創っていく、それを守り、

特養(特別養護老人ホーム藤乃花、同中区幸)には自由度のある終の棲家という視点は欠かせません。こうしてトータルケアをやっているの状態で、年齢によって施設を選択できますし、グループならカルテや既往歴、どういう家族か、好みは何かなど情報を共有でき、安心感があります。

変化に対応しつつ恩返しとして障がい者向けの施設を創りたいと思っています。

— そこにはどのような思いがあるのでしょうか？

障がい者の方でスポーツの当たる人は100万人に数人だと思えます。ほとんどは他人に頼らなくてはいけない。一方で親は「この子のために私たちは先に死ねない」という気持ちがあり、双方で負い目を抱え、苦悩しています。でも、この部分が見えにくいのが障がい者施設です。だからこそノーマライゼーション(障がい者や高齢者がほかの人と平等に生きるための社会基盤整備)、あなたと私は一緒だという関係が大切で、そのために、どんな形でもいいから働き、必要なお金を稼ぎ自立する。両親にも感謝し、社会人としてでき上がった人になれるようなスパイラルを

ウオの目  
タコ  
イボに  
焙煎  
はと麦粉  
掛川茶のやぶち園  
浜松市東区上西町3の17(船越バイパス沿い)  
☎053(464)4418

経営者に聞く・トップインタビュー



【医療法人社団 藤花会グループ】

医療法人社団 藤花会  
藤花会ライフケアサービス(株)  
社会福祉法人 藤花幸寿会

浜松市北区引佐町花平708 ☎053-542-4187

藤花会グループ施設一覧

■介護老人保健施設 花平ケアセンター・短期入所療養介護 ■花平通所リハビリテーション ■グループホーム 花平の郷 ■ショートステイ ひまわり ■特別養護老人ホーム 藤乃花・ショートステイ ■デイサービス 藤乃花 ■藤乃花居宅介護支援事業所 ■井伊谷ガーデンクリニック ■短時間デイ すみれ ■サービス付き高齢者向け住宅 井伊谷メディカルコートガーデン ■井伊谷デイサービス ■サテライトデイ 花平の家つつじ ■訪問介護ステーション ふじのはな ■住宅型有料老人ホーム ライフケア金指 ■ライフケア金指通所介護事業所 ■サービス付き高齢者向け住宅 ふじの花 ■ふじの花通所介護事業所

創りたいと考えています。  
—障がい者の方の自立が叶えば、親は安心ですね。

20名ほどの施設を考えていますが、運営上は難しい障がい者施設であつても成り立つシステムを創らなくてはなりません。そのためビジョンを明確にして、周囲にもしっかりと理解してもらえようにしたいです。

—そこが集大成になる？

トータルケアとして、じつはもう一つ先の事も考えています。医療や介護に携わる人間が「生きる」という事に最前線で取り組んでいます。人生をお預かりし、喜んで自然な形で生きて頂く、そしてそれがスライドして、いつか亡くなるという事も無視できません。しかし、ご家族の事を考えると、お亡くなりになった後でもお金はかかりますし、何かしら安心ではない。ですから、藤花会で一度ご縁があつた人に、納骨堂や共同墓地など、不安なく安心できるものを提案できたら良いなと思つています。清潔感があり、いつでもお花が飾られていて費用もかからない。これ

は利用者様、ご家族の方が安心できる事で本当のトータルサービスになると考えます。勿論これは選択肢としてあるという事です。身寄りのない方や核家族、家族の関係でも気兼ねせずに過ごしてもらえように。そこまで背負う法人があつてもいいのではないかと思う。

—継続の秘訣は？

自分は情熱がある一方で、堅物でバランスが悪い人間だと思つています。しかし、そこに共鳴してくれる仲間が集まつて、今の藤花会があります。そして、自分はコンダクターとしてどう振る舞うかが大切だと思つています。

また、福祉事業に大きな使命を感じ、この仕事に導いてくれたのは祖父の生き様であり、そして、その思いを持った自分を見守り、道を拓いてくれたのが父（藤野匡司氏）です。そうした先人に心から感謝し、報いるという思いが原動力につながつて思つています。

—スタッフ教育については？  
現在500人近い職員が在籍していますが、「こうしな

さい、ああしなさい」という教育は無意味です。挨拶だけで気持ちいいからやるので、教育でやったら薄っぺらいものになる。押し付けではなく考えて仕事をやる。なぜ必要なのかを考え、共鳴しないといけない。競走や競争でライバルがいるのは必要ですが、共鳴して「協奏」し、ともに価値を創り出す「共創」になつていく事が大切です。教育ではなく、同じベクトルで同じ方向を向いて進む。組織、づくりというのはそうした事を言い続け、時間をかけなければいけないという事ではないでしょうか。

—今後の人生設計は？

あと数年で第一線を引退したいと考えています。勿論、仕事は大好きですから、誰が継承しても良き相談役として関わつてはいきますが、次世代の仕事は時代も状況も変化しますから、経営は私と同じ方法ではなくて良いとも考えています。個人的には元気なうちに引退して自然と向き合えるような生き方をしたいですね。それまでは全力で邁進していきます。